幼児の教育　第88巻　第1号　昭和64年1月1日発行(毎月1回1日発行)　昭和23年4月15日第三種郵便物認可　ISBN0289－0836

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

1989 1

お茶の水女子大学 図書室 昭和 63.12.14 受入 雑誌 図書室

第88巻　第1号　日本幼稚園協会

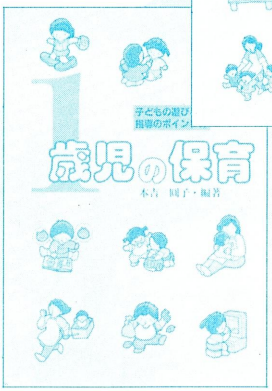
遊びを育てる指導計画作成資料集

子どもの遊びと指導のポイント②
1歳児の保育

子どもの遊びと指導のポイント③
2歳児の保育

実践に役立つ三大特色

1．月別子どもの姿の実例に指導のポイントが付記されていて、発達段階がわかり保育のめやすがつけやすい。
2．子どもの生活を中心にした年間指導計画案は、保育計画の見直しに役立つ。
3．子どもが喜ぶ遊びの実例が豊富で活動を発展させるのに役立つ。



本吉圓子
編著

保育が変ると子どもが変る!!本吉圓子"生き生き保育"の真髄

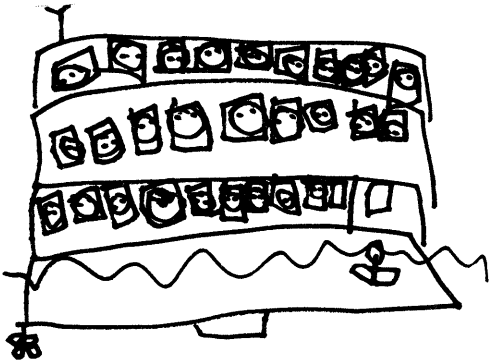
あせらないで待つ保育、つまずかせて学ばせる体験保育、子どもと保育者との一対一の保育、遊びの大切さを保育の信条とした本吉圓子保育の長年の実践を年齢別三分冊にまとめた保育関係者の必読書！

B5判・1歳児の保育（228頁）・2歳児の保育（232頁）・各定価2,000円

<わしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育



第88巻　第1号

幼児の教育　目次

――第八十八巻　第一号――

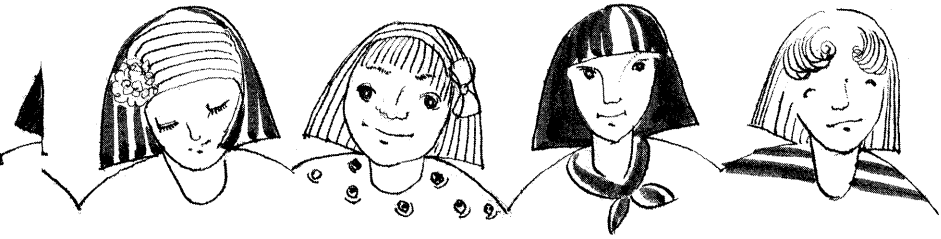
フロイトの家を訪ねる……津守　真…（4）

子どもと(10)
新年の祈り……清水　光子…（14）

自由保育の原点を求めて
――幼稚園とは何だろう――……小川　剛…（21）

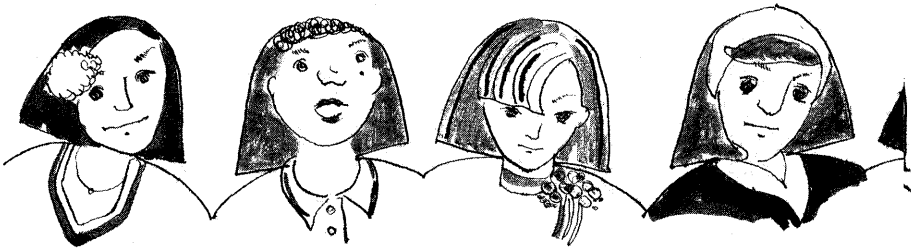
変わること変わらぬこと……M・H…（28）

© 1989
日本幼稚園協会



「保育の原点を探る」
倉橋惣三〝保育法〟講義ノートより……土屋　とく…（32）
臨床の現場から　子育てを考える　その6
子どもの問題行動
――背景に親の世代の問題が――……飽田　典子…（47）
若いお母さんたちへ
アメリカ育児事情……はるにれの会　前田　留美…（56）

表紙イラスト・津守　たたえ
扉題字・堀合　文子
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット・福田　理恵
編集委員・本田　和子／村山　英子
上坂元絵里
編集部・向山　陽子



フロイトの家を訪ねる

津守　真

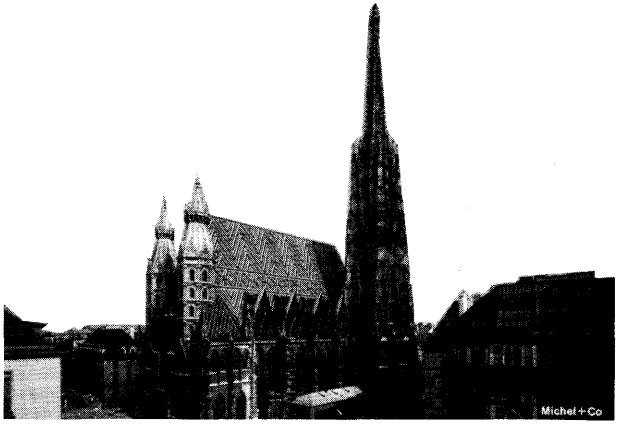
九月の末、プラハで行われたＯＭＥＰ（世界幼年教育機構）理事会に出席することになり、私はウィーンからプラハに入ることにした。かねてから私は、フロイトが仕事をした十九世紀末ウィーンを、百年たった二十世紀末に自分の足で歩いてみたいと思っていた。

モスクワで乗り換えてウィーンに到着した日の午後、プラハへの汽車の切符を旅行社で買うと、直ちに私はフロイトの家を探した。いまは記念館として保存されているフロイト・ミュージアムは、地図に小さく載っているだけである。

ウィーンの旧市街は、リンクという環状道路に囲まれ、そこを市電が走り、一時間もかからずにひとまわりすることができる。旧市街の中心には十二世紀頃に建てられた聖シュテファン教会の広場があり、世界中からの観光客の雑踏の中にある。そこから放射状に走る街路の両側には十七、八世紀からの石造りの装飾建築がぎっしりと並び、その中に教

会、王宮、美術館、博物館があり、ハプスブルク王朝の爛熟した文化の名残りをいたるところに見ることができる。フロイトはステファン寺院をシュテッフュルと呼び、「あのいやらしい尖頭」といっているが、この旧市街の華やかさはその頃からいまもあまり変わっていないのだろうと思われる。そして現在も普通の人々がその中で生活もしている。

リンク（環状道路）を走るD番の市電に十五分ほど乗って賑わいからはずれたところ、シュリック・シュトラーセでおりると、その角から斜めに外側にのびる通りがベルクガッセである。アカシヤに似た並木の両側に、古い建物が並んでいる。市電の停留場から数軒先がベルクガッセ十九番として知られている家で、扉のわきの標識はあまりに小さくて何度も通り過ごしてしまったほどだった。私が扉の前に立ち止まると同時にひとりの婦人が立ち止まって標識を見上げ、ようやくたずね当てたと顔を見合わせた。開館時間は九時から一時、金・土曜日は九時から三時と記されている。すでに夕方で、私共は入ることはできなかった。その婦人は東ベルリンから来て明日は帰るという。私は「そんなに遠くないか



らまた来られますね」というと、「遠くないはよかった、あなたに比べれば」といって笑った。ガッセというとドイツではもっと狭い路をいうのに、これは広い道路だとその婦人はいった。ベルクガッセ十九番と呼びならわされているこの家に、フロイトは一八九一年九月二十日から一九三八年六月五日まで、四十六年間住み、ここで有名な精神分析の臨床をし、著述をし、家庭をつくった。そして一九三八年にナチに追われて英国に亡命した。フロイトが三十五歳から八十一歳のときである。

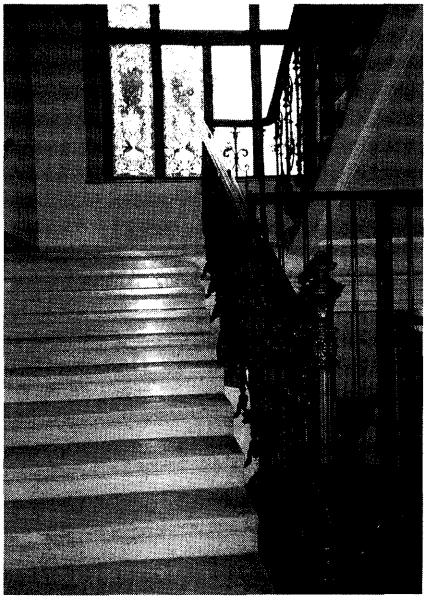
私がフロイトの名を知ったのは、多分私の中学三年ころだったと思う。そのころ、父の郷里から出て来て一緒に住んでいた従兄が悩み多い青年で、私はよく話相手になった。その従兄の書棚にフロイトの本があり、性という字がいくつも並んでいて、それだけで私には触れてはならない書物のように感じられた。商業学校にいっていたその従兄は、召集されて兵隊にゆき、比島で戦死した。その後私は、大学の実験心理学の講義で、フロイトは既に理論的に否定されたと聞き、別の視点から見直そうともせずに長い年月を経た。

あるときから実証科学的方法では保育の実践を明らかにすることはできないと考え至った私は、それとは違う思考方法を探し求め、ユング、フロイトをも本格的に読みはじめた。そしてフロイトが性というときには、生命的エネルギーという広義で考えている場合も多いことを知った。もちろん、いわゆる性はそこからはずすわけにはいかないが、それを忌避するのは、その人の観念の中での性にあてはめて見るからである。フロイトの患者

は、十九世紀末のハプスブルグ王朝最後の時期の、華やかな社交界で生きるのに困難を生じた人々だった。その人々の心の問題にふれたとき、彼は医者としての権威を放棄し、相手の人間と対話する臨床を実践することを決意した。患者がフロイトとの関係の中で、自由な気持で自分自身と向き合えるようになったとき、心の底にひそむ幼児期の体験にゆきあたった。フロイトは、そのひとつひとつを丁寧に考え、彼自身の中にも共通なものがあることを発見した。こうして治療者自身も自己理解を深めつつ患者との間の臨床実践をすすめたとき、患者の人生は新たな方向に開かれる。これはそれまでの学問にはなかった力動的な方法である。

フロイトはこのような臨床を、ベルクガッセ十九番のこの家ではじめた。同じ家の中で、臨床の実践と家庭生活とをほとんど一生涯にわたってなしつづけた。ウィーンの繁華な街に比べたら、質素で見栄えのしない町外れの家で、フロイトというひとりの人の生涯と共にその偉大な文化的事業がなされたのであった。

ウィーンでの第一日目は、私はベルクガッセ十九番の家が見える街角のレストランで食事をしながら、この通



りを何度も歩いたであろうフロイトを思った。

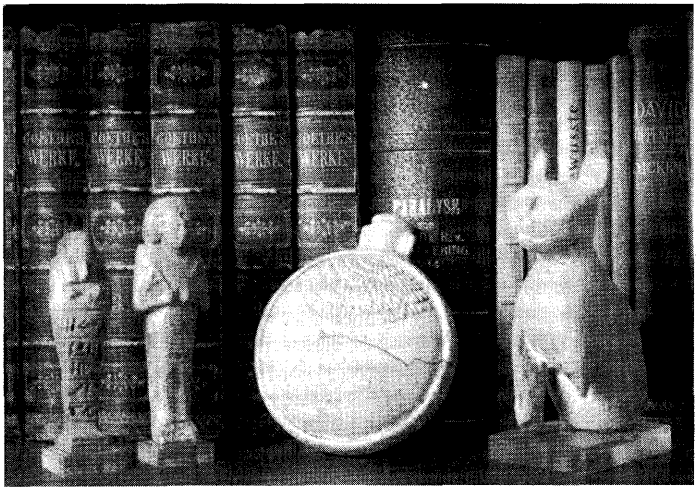
次の日、私は朝九時に間に合うようにベルクガッセ街に行った。ベルを鳴らすと同時に扉を押してくださいとわきに小さく記してある。扉の内側は土間のようになっていて両側に階下の家があり、やや右手に手すりのついた回り階段を上ると左右に家の入口の扉がある。右側がフロイトの仕事部屋と書斎、左側が居室である。右側の扉を開くとその奥が記念館になっている。ドイツ語、英語、フランス語それぞれの分厚い説明書が手渡され、それをめいめいが読みながら各室の展示をみてまわる。10シリングほど払って見学する。

待合室、臨床室、書斎と三間つづきの部屋に、出生から死ぬまでの資料、写真、所蔵品などが年代順に並べられている。説明書の最初には次のことが記されていた。 (1)八十年

間にわたってフロイトが愛し、また憎悪した（Freud liebte und hasste）このウィーンの町の生活背景をできるだけ描写するようにしたこと、最も重要で意味のあるものだけを選択するというようなことがないようにしたことの日常生活をありのままに示すように注意を払ったこと、ひとりの人間であり思索する人であったフロイトは、多くの人々の原型であり典型であるので、見学者が「冷たい、風変わりな、非現実的な人物」として見ることがないように、「どこかでわれわれ自身と結びついている人間」として見るようにしてもらいたいこと、そのために他人の注釈よりも、フロイト自身の言葉の引用を重んじたこと。実際、その分厚い説明書と展示をひきくらべながらゆっくりと見てゆくと、殆ど一日必要としてしまう。この日、私の他にも数人の人が、九時から三時までこの中で過ごしていた。

フロイトは一八五六年、モラビア（現在のチェコスロバキア）のフライブルクで生まれ、三歳のときオーストリアのウィーンに移り、死ぬ前年一

(2)身体的並びに知的な面でのフロイト



九三八年までウィーンに住んだ。臨床室には彼が好んで蒐集した考古学的置物、小さな像や壺などが多数並べられており、壁にはグラディーヴァのレリーフ（模造品）がかかっている。医学研究者の時期からの著書や、大著「夢の研究」その他の書物、論文の初版が並べられている。いずれも粗末な紙表紙である。

一番奥の書斉には、彼が使っていた皮革張りの単純なつくりの椅子の模造品がおかれているが、机はここにはない。窓に飾り枠のついた小さな鏡がかけられており、それは以前と全く同じ位置だという。この窓から外を見ると内庭をへだてて、向かいの家の屋根と壁がみえる。脇にあるとちの木の大木が沢山実をつけていた。これはフロイトも見ていたに違いない。日常の生活も仕事もみなこの二階でなされた。ひとりの人がほとんど一生涯を同じ家の中に住み、そこで実践の仕事をし、思索しつづけたのを見て、実践の学問をするのに、「とどまる」ということが大きな意味をもつことをあらためて考えさせられた。しかし、すべての人にそれが許される

とは限らない。ユダヤ人であったフロイトは、毛並みのよいウィーンの社会からは受けいれられず、華やかな街の中心から外れたところで、そこにとどまるように運命づけられていたように思える。そして敢えてその運命を自分のものとして選びとったところに、この人の生涯と学問があったのではないか。

フロイトの家はやや町のはずれにあるとはいえ、王宮やシュテファン寺院まで歩いて三十分位の距離である。この音楽の都にいながら、彼は音楽には趣味がないといっていた。彼はこの華やかな世界を隣に見ながら、その渦の中にいる人々の影の部分を知っていたのだろう。十九世紀末ウィーンは、どこか現代の東京に似ているように思える。

一日かけてこれらの展示を見て回り、彼自身の著作やアーネスト・ジョーンズの「フロイトの生涯」ですでに知っていることがすべてここにあることを知った。この家の中でこれらのことが起こっていたことを、書斉におかれた椅子に坐って内庭を眺めながら、不思議に思った。書斉は決して広いとはいえない質素な部屋で、この人が長年思索しつづけたその空気がいまもここに漂っているように思えた。

ここを訪れて、はからずもとくに心を動かされたのは、この家でのフロイトの晩年の日日である。丁度ヒットラーのオーストリア侵攻の前後である。展示をした人々は、できるだけ偏らずに資料を並べるといいながら、その思いは晩年のフロイトに至ってとどめ得ない迫力が溢れ出ているように思える。

一九三二年六月の書簡には次の文章がある。「現実には、ヒットラーがオーストリアを征服すれば直ちに私や他の人々に襲う身の危険を、私は決して低く見積もる者ではありません。しかし、耐えねばならぬことを耐えるべく覚悟して、冷静に考え、できるだけ長い間それは考えないでおくことに決めました。現在のところは、オーストリアはドイツの侵略をまぬがれるように思われます。」

一九三三年には、アインシュタインとの間に「何故戦争があるか」の書簡が交された。「他の人々もパシフィスト――平和主義者――になるまでに、どれだけの期間、私たちは待たねばならないのでしょうか」とフロイトは記す。

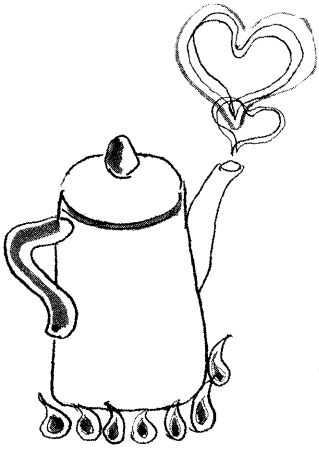
一九三八年三月十五日、ウィーンにドイツ軍は侵攻した。王宮わきの「ヘルデンプラッツ―英雄広場―」で総統（ヒットラー）はウィーン市民に向かって演説した。フロイトは論文の中に次のように記した。「われわれはこのできごとを、個人が自我の理念を引き渡し、リーダー（総統）に具現されている集団理念をそれに代えたものと解釈する。そして更にわれわれは付け加えねばならない。このような運命は、それぞれの人にひとしくかかってくるものではないと。」ユダヤ人フロイトの記事である。展示の説明文は更に次のことを記す。

「私はヒットラーの手がウィーンにまでのびてきたのを見た。私はゲシュタポがベルクガッセのあの懐かしい家に入るのを見た。彼らがこの研究所を閉鎖し、精神分析の出版物も、書棚に収められた美しい本の数々をもただのパルプにかえてしまうために持ち去るの

を見た。そして、私は、八十二歳のフロイトが、家族と共に自由な英国へと脱出するのを見た。そこで彼は一年たたぬうちに、残酷な病気に襲われて死んだ。彼は英雄的な諦観をもってその病いを長年の間耐えてきたのだった。」

「一九三七年九月二十三日、ジグムント・フロイト、ロンドンで死去」と簡単な死亡通知が展示されていた。

私がベルクガッセ十九番を訪れたのは、丁度、一九八八年九月二十三日で、没後五十年に当たっているのに気が付いた。何の記念行事があるのでもなく、何人かの訪問者と一緒にこの家で数時間を過ごし、その書斎の窓から内庭のとちの木を眺めつつ、それぞれが説明書からメモを写した。



（愛育養護学校）

子どもと(10)

新年の祈り

清水　光子

あけましておめでとう
新年おめでとうございます
の挨拶がかわされる一九八九年のお正月が巡って来た。
「お正月だ、新年だなんて、人間が勝手にきめたことで、きのうと今日とおなじ太陽じゃないか、どうってことないじゃないか」という人達もいるけれど。

「育ての心」の「正月」に、「日本の子どもが揃って一斉に、一つ宛大きくなったと思うと心の底からほほ笑ましくなる。」とあり、「自分の新しい齢を誇っている。あのかわいい指で、口で」中略「実際、正月が公平にわけてくれた齢の中でも、子どもらの分は黄金の特製で、どれも一つとして輝かしい光に輝き光っていないものはない。」と言っておられる。その頃の年齢の数え方と現在のそれのちがいは言うまでもないが、この文章には倉橋惣三先生が新年にあたって子ども達への熱い希い、祈りがこめられていると私はしみじみと思う。

いつもは「おはよう！」と飛び込んでくるY君が、始業の日、ちょっとはにかんでおじぎまでするかわいらしさ。つややかな頬と澄んだ瞳、この老婆は涙ぐんでしまう。

Mちゃんは少しちがっていた。きちんと手を揃えて「あけましておめでとうございます。」と頭をさげて言うのだが、どうしたことかこちらの顔をみない。「おめでとうございます。」と応じて、「Mちゃん、また一ぱい遊ぼうね。」と手を取って、顔を覗いて言う。「うん、」とうなずいて、にこっと笑ってくれた。老婆は何かほっとして、うれしくてまたしても胸を熱くする。どの子もどの子も元気で明るいこの年の日々がありますように、黄金の特製の年であるようにと切なる願いがこみあげる。

倉橋先生は『幼稚園雑草』の中で「お正月が来た。子どもの喜ぶお正月が来た。子どもの喜ぶことなら、年が年中でもいい。いわんや一年に一度のお正月だ。いくらでも子どもを喜ばせてやりたい。」と言っておられる。これは半世紀前のことである。「世界中が彼等（こ

ども）のためににこにこしていて呉れる。」「遊べ、遊べ、なぜもっと遊ばないのかといって呉れる。実にお正月は世界中の児童観を変えると言ってもよい。何という幸福なことだろう。」倉橋先生のこれらの言葉にこめられた希い、祈りを今、あらためて声をあげて叫びたい。日本の将来の為にとか、人類の進歩の為にとか大げさなことでなく、ごく身近な、私のクラスのAちゃんB君、お隣りの家のC君とその弟、妹ちゃん達どの子もどの子も一杯に自分を出して、気儘でない自由な遊びを楽しめるような時間と空間を取り戻すように、大人が真剣に工夫をしようではないかと思う。

「うちのS子はかぜをひき易いので、なるべく外へ出さないでください。」と母親が言って来た。S子ちゃんは顔色がよくなく、大声を出すこともない。といって遊ばないというのではなく、母親が「幼稚園で教えていただかないけれど、うちのS子はかなは全部よみ、かけますし、漢字もずい分よめますの。」と自慢（？）するだけあって、絵ばなしを皆で作るなどという時は大はりきりで、しっかりした字をかいて子ども達の賞讃の的になったりする。が、受け持ち保育者は今いち物足りない。そのS子が珍らしく暖かい日射しの一月のある日、なわとびのグループに加わった。〝おなみ〟をしばらくみていて、一大決心したように順番が来てとんだ。ひっかかりもせず五回とんだ。「とべた！」という成功感にその満足した顔といったら！　大分なわとびに加わっていて「先生、暑い！」と来たのでさわってみると肌着がしっとりぬれている。「かえようね。」と乾いた備え付けと取りかえようとした時、驚いたのは大へん厚着をしていることだった。「風邪をひき易いか

ら」との心配でとはわかるが、それがかえってこの子の活力を阻んでいたのではないかと思った。降園の時、母親にその日のことを活し、母親の自信と誇りを傷つけないように気をつけながら薄着をすすめたことだった。

北半球、殊に日本列島では、一年中で一番気温の低いのが一月から二月の中旬のようである。空気がかわいて、関東地方など北風が強く吹いて外はひどく寒い日が多い。けれど地球は確実に春に向かって動いていて、冬至十日をすぎると昔の人の言った「畳の目ほどずつ」日が伸びる。そのような中で、昔からの外遊びがあるのはうれしい。日だまりで押しくらまんじゅうなどは知る人も少ないかもわからないが、なわとび、石けり、ドンジャンケン、陣取り、少し大きい子どもは缶けり、それらのヴァリエーション。場所と時間さえあれば現代の遊べない子といえども子どもは遊びの、遊びづくりの天才だと思うし、私はそう信じている。その環境ときっかけをつくってあげる大人、新年に、心を新たに何かを始めようという「子どもをめぐる大人」があったら、何とかしてまずそれを始めて欲しい。

三学期は卒業（園）を控えてさまざまな行事が次々にひしめいていて、園・親たちは入園、入学、卒園とまた心忙しい。子どもを取り巻く大人の心がいつにもましてせわしなくなり勝ちであり、これだけはせめてやらせたいとの熱意で子どもを追いつめてしまうことがありはしないか、それでなくても室内に籠ることが多い時期である。

もう何年か前によんだ森本哲郎著「ゆたかさへの旅」の中で「物質的に貧しい国ほど時間は豊かである」とあって感銘を受けた。物質的に豊かすぎる程豊かな（？）現在の日本で、子ども達は時間を決して豊かにもっているとはいえないと感じられる。

南向きのテラスの日溜りに座ってT子とY子と私、あやとりをしていた。Y子がお姉ちゃんから教えて貰ったという〝月にむら雲〟という独りあやとりをT子と私に教えてくれていた。そこへNちゃんが来て「これほどいて」と毛糸のあやとりひもを持って来た。「いいわ、私、ほどくの名人」なんて言いながら眼鏡をかけて解き始める。「どうしてこんなに固くこぶを作ってしまったのかしらねえ」とつぶやきながら少しずつほどいていく。T子、Y子、N子ちゃんもじっと私の手元に見入っている。それをはじめは意識していたのがだんだん私自身、夢中になって解くのがたのしくて……。Nちゃんが「ほどいておいてね―」と園庭に走っていってしまうのを「OK！」と返事しながら、私は今、何という怠慢な無責任な保育者だろうと思ったことだった。代々木公園に、みんなで作った凧を飛ばしに（揚げるほどではないので）行った時も、捨てられた凧糸があちこちにあるのを集めて、もつれをほどき、新聞紙を折ったのへ巻きつけるしごとを、まるっきり貧乏性でやっていた。「おばあちゃん、何してるの？」と三歳のMちゃんが手元をみてふしぎそうに尋ねる。「凧の糸、ほどいてるの」そこへU君が来て「切って、つなげばいいじゃん？」「わたし、切るのきらいなの、ほどくの好きなの。」と答えて、つい夢中になって、新聞紙に巻かれた糸も可成りになった。嬉しくて、私が持って来た凧の短い糸に、今ほどいた糸

をつなぎ、風に向かって走る。その手ごたえの快さ。

ほほを赤くして外から入って来て、室内の暖かさにほっと寛いでする室内遊び、お正月に限ったことはないけれど、子ども達でつくったカルタ取り、双六、福笑いなど、昔からあるものが又、このごろの新しい感覚で登場しているのも楽しい。

お正月休みで「どこへ行ったとき」の話も出、「誰ちゃんと会ったね」など、生活発表というような堅くるしさのない話しあいの中で、人の話をきくという大切なことを学ぶ機会があろうというものである。そんなときGちゃんが「ね、初夢って知ってる?」ときく。「ええ、お正月の二日の夜みる夢のことでしょ?」「うん、富士山の夢見るといいんだってさ、それ、僕、見たんだ!」「まあ、Gくん、いっぱいいいことあるわね、きっと。」まわりの子ども達はそれから、夢のこと、あれこれ賑やかに話しがはずんでいった。私、老婆は

ふじの山　夢に見るこそ果報なれ　路銀もいらずくたびれもせず……油煙斎永田貞柳

を思い出していたのだ。

お正月というと初という字がつくのがいろいろある。初詣であり、書初め、弾初めはいうまでもなく、その意はふしめを何かの生活の向上のきっかけにしたいのではないかしらと思う。でも漱石が「三四郎」の中で故郷の母から来た手紙を「古ぼけた昔から届いた様

な気がする」と言っているようなことでもあろうが。

物皆は　改まる良しただしくも　人は古りゆく　宜しかるべし　　万葉集よみ人知らず

でもあろうか。

ともあれ

生ける者　遂にも死ぬるものにあれば　この世なる間は楽しくをあらな

万葉集・大伴旅人

幼き子らには切に楽しい日々をと祈りたい。

「子どもたちよ、さあいっしょに遊ぼう。よろしくお正月はおまえたちと遊ぶためのお休み日なのだ」（幼稚園雑草より）

遊んで、遊んで、子ども達みんなのよいお正月、よい年であるように祈る私のお正月である。

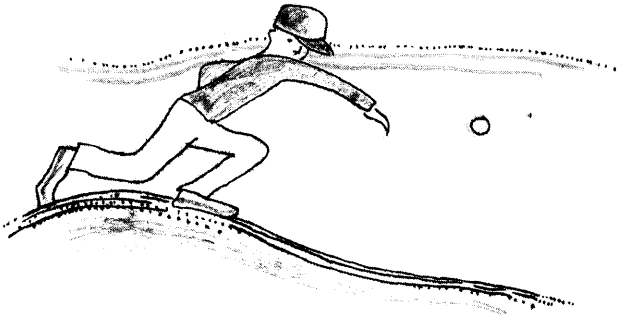
（音羽幼稚園）

自由保育の原点を求めて
――幼稚園とは何だろう――

小川　剛

はじめに

附属幼稚園長になってから、しばらくして、ある小学校の行事に招かれたことがあった。その時、強く印象に残ったことは、先生方の児童への命令・指示の声がとくに際立ったことである。児童の行動は、ほとんどすべて、それらによって律せられていた。学校とは、このようなところであったのか、と改めて痛感させられた。私自身、戦中・戦後の教育を受けて、その対照的なことに驚



かされた経験をもち、職業柄、成人の学習活動に参加することが多く、そこでは、ほとんど、命令・指示の声を聞くことがない。また勤務園でも、子どもたちのにぎやかな遊び声は聞こえても、先生方の命令・指示の声はあまり聞くことはない。子どもたちは、遊びの中で、すくすくと成長している。そんなことから、幼稚園そして教育の場は、もっと子ども本位のところであろうと思い込んでいたところから、前記の体験がショックとなったのであろう。

その後、意識的に、学校についての見聞を拡げるなかで、前記のことは、いわゆる行事時だけのことではなく、日常的な学習指導の場面でもみられる一般的な現象であり、また、それは、小学校だけに限られたことではなく、学校教育全体が、いわば命令・指示によって支えられているといっても過言ではないような状態が拡がっていることを知った。現在、学校では、児童・生徒は、自らの責任と判断とによる自主的な行動ができる存在とはされていないようである。これで人間らしい人間が育つのであろうか。これは、大きな問題である。しかし私たちの当面の課題ではない。

ここで問題にしたいのは、幼稚園の学校化である。私のささやかな見聞でも、それはかなり進んでいるようである。幼稚園でも、先生の命令・指示の声が飛びかい、学校顔負けの教科指導がされていると聞く。そこでは、子どもたちは、己を殺して、ひたすら先生の命令・指示を待つ〝対象〟となってしまっている。これは、おかしいのではないか、と素人園長でも思う。

ときあたかも、文部省による新教育要領の公表があった。そこで示されているものは、勤務園のあり方こそ本筋であり、学校化したものは、それを踏みはずしたものであることである。これに勇気づけられて、「幼稚園とは何か」の探究の旅に出かけることにした。素人の新鮮な眼差しをもって。

一、

幼稚園は、本来、子どもたちの自発的な行動を重視し

て、あまり命令・指示を行わないところである。なぜだろうか。それは幼児教育の原理とそれにもとづく保育方法に由来するものである。このことをあきらかにするためには、その原点に立ち戻らなければならない。

そもそも「幼稚園」の原語は、ドイツ語の〝Kindergarten〟（子どもたちの庭）であり、この創出者はフレーベルである。アメリカは、世界的に、幼稚園の発展に尽した国であるが、そこでも、あえて〝Children' garden〟と英訳せずに、原語のまま、それを用いている。このことは、フレーベルの精神を生かしていこうという意識がそこに働いてのことであろう。このことからも、幼稚園の原点は、フレーベルのなかに求められなければならない。

かれが幼稚園の構想を得るまでには、長い道程があった。

かれは、生後間もなく母を失い、牧師として多忙な日々を送る父、かれをあまり理解しない継母のもとで、淋しい少年時代を送った。これがかれの教育論の土台をなす原体験となった。暖かい家庭愛と母への憧憬の念は、かれの教育論全体の低音基調となっている。それが、後半生において、幼稚園の構想・家庭教育の重視となって、主題となる。

少年期を過ぎて、かれは、いくつかの職業を経めぐって、二三歳の時、偶然に、教育にかかわるようになる。そこで、かれは、「水中の魚、空飛ぶ鳥のように幸せである」と感じた。天職との出会いである。しかしそれを一年でやめ、その後、ペスタロッチのもとで二年、さらに、ゲッチンゲン、ベルリンの両大学で、それぞれ学んだ。

一八一六年、三四歳で、甥の教育を引き受けたことを契機に、自らの思想と方法による学校経営に乗り出す。当初は、グリースハイムであったが、一年後、カイルハウに移り、そこで一四年間、妻のヴィルヘルミネ夫人、友人のミッデンドルフ、ランゲタール、そして兄たちの協力・援助を得て、その教育事業をつづけた。そこでの体験・思索にもとづいて書かれたものが、かれの主著と

される『人間の教育』（一八二六年刊）である。ここで、かれは、自己の教育原理を生み出すとともに、教育の出発点である家庭教育・幼児教育の重要性を見出した。その後、また、いくつかの教育的遍歴を経て、一八三七年、五五才で、ブランケンブルグにおいて、幼児教育に本格的に取り組むこととなる。そこまでの道程は長く、またこれこそかれの教育理論の原点でもあった。そしてそれを具現化したものが幼稚園だったのである。したがって、その本質を見定めるためには、かれの教育論の基本をおさえておかなければならない。

二、

フレーベルによれば、万物には神が宿り、したがって、自然物にはもちろんのこと、人間＝幼児にも神的なものが内在し、それがそのものの本質をなしているとされる。それらの本質、すなわち神的なものは、「永遠の法則」にもとづき顕現するが、それを十全に実現させることは、万物の使命・天職とされる。たとえば、植物の発芽から結実に至る過程は、まさに、その使命の達成過程であり、人間も、同じ法則に則っとり、その発達過程を通して神的なものを顕現化を図るべき存在である。しかも、この過程は、神的なものの顕現化であることから、内から外への自発的な活動として現れる。幼児にみられる発達の自発性の重視は、以上のような根拠にもとづくものである。

この過程を十全なものとするためには、神的なものが人間により意識化されていること、また人間が自由にかつ意識的に神的なものに従って生きることができること、さらに神的なものを自由に表現できるように人間が高められていること等の条件が整えられる必要がある。そのために、人間を刺激・指導し、その内的法則と神的なものとを自覚的に表現できるようにすること、ならびそのための方法・手段を提供することが、人間教育である。

この神的なものの自発的な活動は、全く善以外のものではありえないから、妨害されないかぎり、それは必ず

善であり、また善でなければならないとした。したがって求められる教育的態度としては、あくまでも受動的・追随的なものでなければならない。とくに、幼少期での命令的・規定的な教育は、子どもの内的なものを損ってしまうおそれがある。

以上のことから引き出されるフレーベルの教育論のエッセンスは、まず、親・教師は、自然・人間の本質について十分な認識をもち、子どもの自発的な行動を尊重し、またそれを十分に観察し、内から現われてくるものならびそれを支える法則の働きに注意し、それらの十全な実現のために助力することにあるといえる。フレーベルは、『人間の教育』のなかで、このような教育原理を編み出した。

また、幼児教育については、「内なるものの自由な表現」であり、「未来の全生活の子葉」でもある遊びの意義が見出され、両親にそれを大切に育て守ることを求めている。しかし幼児教育の重要性を実感的に把握するようになったのは、スイスでのいくつかの教育体験を通してであった。そして具体的な方法として生み出されたものが、恩物であった。子どもの成長・発達を内在するものの顕現化とみるフレーベルにあっては、幼児教育とは、子どもに、その精神の自己表現のための「適当な材料」、すなわちそれに適した遊具を系統的に与えることを意味した。そしてかれが重視する〝遊び〟と〝作業〟とを独自の象徴主義により表現した。そのための遊具が恩物であった。そして今日にいたるまで、恩物を主要な遊具として幼児教育を行うところは、フレーベル主義幼稚園とよばれている。

当初におけるかれの幼児教育活動は、恩物の製作・普及活動であり、その過程を通して家庭教育・母性教育の再発見がなされ、幼稚園教育と結びついていく。

一八四〇年六月設立された「一般ドイツ幼稚園」は、狭義の幼稚園ではない。それは、母性教育を目的とするものであり、「児童を愛する女性のための直観や教訓の場所であり、初期の幼児の保育や作業に関する直観もしくは教訓の場所であった」(荘司、同上書、一九七頁)。

幼児教育施設は、母性教育のための実習所だったのである。そこでは恩物を使った保育活動が行われたのである。これが、今日の幼稚園に発展していくにあたっては、当時の欧米諸国での幼児教育をめぐる状況、とくにアメリカにおけるその普及と、そこでの理論ならびに実践面での深化が、あずかって力があったといえよう。ここでは、紙幅の関係から、これについては、割愛したい。

三、

現代に生きるフレーベルの幼稚園、すなわち自由保育方式をとる幼稚園では、どのような保育が行われるのか。「わが国のフレーベル」ともよばれる倉橋惣三の『幼稚園真諦』（昭和九年刊）をもとに、その姿を描いてみよう。

幼稚園の究極的なねらいは、子どもたちが遊びと作業とにより「自己充実」をとげていくことで成長していくのを助けることである。

そのためには、まず、そこでの活動は主役である幼児本位のものでなければならない。このことは、そこでの生活形態が幼児に適していること、すなわち幼児の自然の生活形態であることを意味している。したがって、幼程園が配慮すべきことは、幼児たちがそこに来て、ラクに自分たちのものと感じることができるようにすることである。さらにいえば、幼児自身が自分の生活を充実する工夫を自らもっていることを信用して、充分な自己充実ができる自己の天地をもつことができるようにすることなのである。

そのためには、幼程園は、幼児自身がその自己充実力を充分に発揮できる設備をもち、さらにそれに必要な自己の生活活動のできる場所となっていなければならない。いいかえるなら、幼児たちの生活は設備を通して発揮されるのであるから、幼稚園には、幼児の多種、多様な活動を予想して、豊かな設備がととのえられることと、幼児のめいめいにその設備を使わせていくにあたって、幼児に生活の自由が充分に許されていることが必要

なのである。ともかく、幼児の自由感こそ設備を生かしていくもとなのである。幼稚園は、幼児たちが伸々と自由感を味わいながら、いろいろな設備を使いこなし、自己充実を図っていくところなのである。

「自己充実」といっても、幼児自身、だれの助けもうけず、自力でやるものもおれば、それのできないものもいる。そこで、幼稚園では、そのような幼児を対象に「充実指導」が行われる。これは、相手の内部に即しての内部指導であるから、実施に当ってはその子が何をどの位まで「充実」することを求めているかをはっきりさせ、その子に合った内容を、合った方法とレベルまで指導するという細やかな配慮が求められる。

「自己充実」とは、幼児は幼児なりに自分の生活の意味を理解し、それを発展させることで成就感あるいは達成感を味わうことである。マズローの言葉を使えば、自己実現というものを幼児なりに体験することといえる。したがって、そのためには、幼児は、それなりにその生活についての意味づけを行わなければならない。ところが、幼児の生活は、刹那的で断片的であって、そのままでは意味づけが困難である。刹那的で断片的な生活に系統性を与えていくことが必要である。これを「幼児生活の誘導」とよんでいる。これは、幼児の興味に即した主題で幼児たちの生活を誘導することである。たとえば、幼児を水族館に見学につれていくことで、魚についてのかれらの生活に系統性を与えていくということが考えられる。現在、高度に発達している視聴覚的手法を使うことで、より容易かつ効果的にこれを行うことができるであろう。

幼稚園では、この「誘導」につづいて、「この子には、もう一つこれを付け加えてやりたい」ということから、「教導」を行うこともある。しかし、これは、本来、学校教育の本領とするところであって、幼稚園教育としては、最後にあって、むしろちょっとするだけのこととされている。つまり「幼稚園はどこまでも、幼児の生活たる本質をこわさないで教育するところに、その方法の真諦が存する」のである。

最後に、フレーベルは、自分が構想した幼児教育施設に「キンダーガルテン」（子どもの園）という名称を与えた。このことについて、倉橋はつぎのように述べている。

「園とはこれ、実に、自ら生育すべき種子が、周到なる園丁に保護せられ、育成せられて、その発達を全うするところである。そこには、野生でない自然がある。温室でない培養がある。放任でない自由がある。抑圧でない管理があり、強要でない期待がある。のみか、園の一字に、何という心持ちのあたたかさと、やわらかさと、うるおいとの感ぜられることであろう。フレーベルが幼児の教育について抱懐する理性と感情とが、美しくも盛り込まれているのみでなく、正しくて素直なる感触を以て、これを他に受け取らしめる」

（『フレーベル』）

ここに、幼稚園のたましいが、あり方が、余りなく示されている。幼稚園は、何よりも「子どもたちの園」なのである。

（お茶の水女子大学）

変わることと変らぬこと

M・H

新しい年の訪れである。しかし、暦の変化とともに「新春を寿ぐ」という、あの伝統的な感覚が、果たして私どもの中にいきいきと脈打っているのだろうか。新春を実感するのは、もしかしたら、「正月番組」を録画し終えたテレビ局や、歳末セールで商品を売りつくしたデパートだけなのではと、皮肉な視線を投げてみたくもなる。

伝統的社会が作り出した「ハレ」と「ケ」のリズムが、私どもの日常とは無縁と化し、そのこともたらした生活の平板化が憂えられて、既に久しい歳月が流れている。幼い人たちにとっても、「お正月」は、単なる休日以上に特別の意味を持たず、街中の新春化粧も、クリスマスや七夕の、さらには時を選ばずくり返される「○○まつり」の、飾り付けとしてしか受けとめられない昨今、この雑誌も、ことごとくしく「新春の企画」を表面化する必要などないのではないか。「表紙」が新しくなった。「巻・号」を改めた。その程度で、あるいは充分ということかも知れない。

しかし、保育現場では、やはり「お正月らしさ」を演出して、それなりの工夫が試みられることだろう。そして、地域社会でも、子ども向けの新春行事が企画される。たとえば、「たこ上げ大会」、「年賀状コンテスト」などなど……。

懐しく、温かった過去への愛惜と、伝統の喪失を憂える一種の共通感覚が、こうしたイベントの推進力となる。これらイベントは、しばしば「子どものために」とスローガンを掲げてはいるが、実は、公的にも私的にも、「大人たちのため」だったりするのではないか。「伝統」を愛しむのも、それを価値として重視するのも、いずれも幼い人たちでないことだけは確かだからである。

私たちの時代は、余りにも急速に「古いもの」を破壊し尽くしてきた。そして、いま、私たちの予測を越えた速さで、新しく未知の社会が近づいてきつつ

ある。いわゆる「情報化」「ハイ・テク」の時代……。通信網の発達やコンピューター機器の普及は、抗いようもなく私たちの日常を変貌させている。そして、この変貌は、とどまることを知らない。私たちには、行手が見えなくなりかけている。何が待ち受けているか不明の明日……。

「伝統回復」と、その「継承」を叫ぶ声が、あちこちで上り始めたのは、恐らくこのことと無縁ではない。未来が見通せぬとき、私たちは、無意識のうちに「過去」をふり返る。すがりつくものにしか見出せないということだろうか。いま、歴史研究が活況を呈し、歴史への大衆的人気が盛り上っているのも、その一つの現われと言えよう。

しかし、幼い人たちは、「現在」を生きつつある。私たち大人世代にとっては、困惑に満ちた現代であろうとも、彼らにとっては自明の現在に他ならないし、私たちにとっては、不安と混迷の明日も、彼らにとっては淡淡と引き受けるしかない時の流れである。

急テンポに進み続ける生活の変化に、世界的規模の一大決意の下、ストップをかける……。こんなことが、果たして可能だろうか。あるいは、日常レベルでの伝統と現在のバランスを、どのていどに保ち、その妥当性を検証すべく、どんな目盛りを作り出していったらよいのか。私たちが現在を憂えたり、過去の復権や継承を企てたりするときは、当然ながら、こうした思索が前提となっている筈である。しかし、多くの場合、私たちは、この前提をふんでいない。現象としての変貌に当惑し、「ついていけない」という生活実感が無意識的な前提となって、慌しく「手がかり」となりそうなものが探し出される。「過去」という既知の世界の中から……。「伝統回帰」の企てが、こうした脆弱で便宜的な姿勢に支えられていなければ幸いである。

保育現場で、幼い人たちの素朴で自然な「生活」と、自由な「遊び」を重視しようという声が、以前にまして盛んになり始めている。このことは、新しい教育要領の眼目でもあるだろう。そして、そのこと自体は、もちろん、当然すぎるほど当然な、幼児保育の不朽の真理に他なるまい。幼い人たちの「生活」と「遊び」を無視した保育など、考え得べくもないことだからである。そのゆえに、また、「生活」と「遊び」の重視は、幼児保育界に脈脈と流れ続ける、不滅の伝統でもあるだろう。

幼い人たちに、自然な「生活」と自由な「遊び」を保証する新要領の方向性も、それを率先して実践しようとしている現場の動向も、その「正統性」を讃えられてしかるべきであろうし、その「健かさ」は充分に評価されねばなるまい。しかし、この流れが、先ほどから考えてきた「伝統回帰」の動きと、どこやらでつながるのかも知れないと気付くなら、私たちは、この流れを手放しで讃美し、喜んで身を任せてだけはいられないのではないか。

幼児保育の不滅の真理、変わることのない流れとばかり、その自明性に安住することなく、この激変の「現代」を自分たちの「現在」として生きる幼い人たちにとって、保育の真髄が変わらないのは何故か、あるいは、変わらなくてよいのは何故かと、問い直してみることが必要であろう。「健全さという名の鈍感さ」は、私たち保育界に、しばしが見出される特性である。このことは、一面から言えば、保育という原初的な営みを安定させるべく、重要な特性でもあるのだが、また、弱点の一つに他ならないことは、否み得べくもないからである。

（お茶の水女子大学）

「保育の原点を探る」

倉橋惣三〝保育法〟講義ノートより

土屋　とく

『根本考察が足りない。根本考察が足りないから、問題がいつでも枝葉のところを動いている。かなりいろいろのことが考えられ、試みられ、部分的に究明されるにもかかわらず、意極の決定はいつまでも残されている。』

倉橋先生は亡くなる直前の〝幼児の教育〟に―新しき年を迎えるにあたって―という巻頭の言葉を、こう書き出されている。

第五十四巻　第一号

ここに示す資料は、東京女子高等師範学校（現　お茶の水女子大学）保育実習科生を対象に、昭和九年四月より翌十年三月まで一年に亘って行われた「保育法」講義の記録である。その内容は倉橋先生が信ずるところを、いわば内に向かって自由に発言し、理想の保育者養成へ力を傾けておられた心情が、そのまま感じられるものとなっている。

しかし講義の記録という特殊性からか、倉橋惣三選集

その他に本文は著作としての記録がなされていない。

因みに、この時期、附幼百年史によれば、現園舎が八年に新装なり三月ひなまつりに新築祝いをした。

人形の家　おもちゃや　動物園などの活動は、幼児の直接経験することや興味をテーマとして総合的な保育を目的としている。これは誘導保育のはじまりであり、また「幼稚園真諦」「系統的保育案の実際」が刊行されたのも九年である。と記されている。

このノートの存在を土屋が知ったのは、五十八年三月倉橋惣三生誕百年を記念して催された、児童学会の例会の帰途である。

その日、お茶の水女子大学付属幼稚園に四十数年在職し、倉橋園長の目指すところを実践に生かして、日本の幼稚園界をリードされてこられた　菊池ふじの先生　が当時を知る数少ないお一人として、「倉橋先生から学んだこと」と題して講演をなさった。

大妻女子大学の一室でのお話は、その思い出と共に日常の保育の中で、直接、間接に学んだことを静かに淡々と話され、出席者に多くの感銘を与えたものであった。

菊池先生を、お宅近く迄お送りする間「このノートで私は随分教えられましたよ」と見せて下さったのが、この「保育法」の講義記録であった。

学部の教育実習の指導教官として、お世話を頂いた甘えから厚かましくノートの拝借を申し出た自分に、菊池先生は快く目を通す事を許してくださったのである。

そして頁を繰るうち、私は胸の高まりと感動を抑えることが出来なかった。そこには「保育法」の講義内容が、生の声そのままに一言半句おろそかにせず細密に記録されてあった。と同時に私自身、長い間疑いの域を出なかった幾つかの事柄が、明快に説かれていたからである。しかし大事なノートゆえ重要事項のみ書き取り、早々にお返しにあがった。

その時から数年を経て、いま、幼稚園教育は要領の改善等、新たな動きが行われようとしている。この際保育

の原点を探るためにも、このノートの存在を広く世に出すことの意義を強く感じ、菊池先生に思いを訴えたところ、こころよく御許可を頂くことが出来、御高齢ゆえにノートを全面的に託してくださったのである。

ここに公開する機会を得られたことは望外のよろこびであり田村様　菊池先生の広いお心に感謝するばかりである。

講義は、かなり時代を経ているものである。記述の再現は出来うる限り原文に忠実であるように努めたが、口述記録であるため倉橋先生の独特な語り口や、内容の理解に困難を感じる部分、また現代的視点からの違和感が皆無とはいえない。

しかし、それらを超えて一貫して流れる子どもに対する温かいまなざしと、保育の真髄を語る内容は、今もなお光を失ってはいない。

特に保育のあり方をめぐり、幼稚園真諦との表裏の関係に於いて、現代的課題に応える貴重な資料であると考える。

＊　＊　＊

「保育法」の講義記録は私が付属幼稚園に在職中、当時の保育科生であり、後に付幼の教員もされた　田村薫（旧姓　大岡）さんが倉橋先生の講義をノートにとり、更に菊池が全文書写していったものです。

私は本校卒業後ただちに付属幼稚園の担任になりましたが、女高師の家政科では児童心理や家庭教育といった講義の中で、倉橋先生のお考えを伺うことは出来ましたが保育論を直接お聞きする機会がありませんでした。

また毎日幼稚園に身を置く立場からは、実習科での「保育法」の講義を聞くことも適わず、こうした方法を通して漸く先生の保育に対する貴重な理論を知ることが可能になったのです。

以後このノートは数十年に亘り私の保育を支え、保育者養成の「保育原理」講義の際にも、貴重な文献として役立たせて頂いてきました。

講義録の前半は、特に、保育に対する真髄を学生に如

何に伝えるか腐心された先生の熱気のようなものが感じられます。後半は、諸事御多忙の故か、私達が最も詳細にお聞きしたかった保育内容論でありながら、簡単にしかお話しいただけなかった点は残念でした。

このたび公開し諸氏の保育の探究に資することが出来れば幸いです。

菊池ふじの　談

＊　＊　＊

「保育法」

目次

第一章　幼稚園

第一節　幼稚園の目的

第二節　学齢前の教育

第三節　保育の意義

第二章　保育方法の原理

一　自発性
二　具体性　幼児生活の特色

（幼児の生活原理）

第三章　保育法の原則

第一原則　間接（教育）の原則

第二原則　相互教育の原則

第三原則　共鳴の原則

第四原則　生活に依る誘導の原則

第四章　保育方案

第一　保育項目

第二　仕組み（目的）

第五章　保育項目

一、製作

二、観察

三、談話

四、遊戯及び唱歌

五、遊戯

第一章　幼稚園

第一節　幼稚園の目的

教育にはすべて一つの目的がある。その目的を明らかにしてこそ教育は成るのである。我が国の幼稚園の目的

幼稚園令に定められた事を見ると、

第一条に

「幼稚園は幼児を保育し、その心身を健全に発達せしめ、善良なる性情を涵養し、家庭教育を補うを以て目的とす。」之を分解して見ると根本の意味は難しい。

幼児そのものに実現する結果から見ると前の文句になり、幼児の社会的意義から言うと後の文句になる。

家庭教育を補うを以て目的とす。この言の根底の意味となるべきものは、幼児の保育・教育は家庭教育を以て根本的、基礎的な即ち主体となるべきものである。

故に幼稚園とは単に家庭教育を補う補助機関であって、決して家庭教育の代理となるものではない。

基礎を基礎として、それを補う幼児教育は家庭教育を主体とする。

仮に不健全な家庭を持つ子どもがあるとする。例えば親の労働のため、一日の大半は託児所にやられる。そして一日中大抵家庭外にある。そんな子どもでもその子の根本的に大切なものは、やはり家庭なのであって、託児所は家庭の代理とは言い得ないのである。

「補う」

補助物というものは、一体、その本体と同一物でなければならぬものである。紙が破れれば紙で補う、壁が駄目になれば壁を塗って直す、布の破れたのに紙をあてがうが如きは単にくっつけたに過ぎないと同様に、家庭教育を補うと言うのなら家庭教育と同一の物を用いなければならぬ。即ち家庭教育に類するもの、相似せるものでなければならぬ。

即ち結論は、幼稚園の目的は家庭教育と同じ様なものであってこそ達せられると言うのである。家庭教育以下に付加する事にはならない。

幼稚園教育と家庭教育を比較してみる時、幼稚園は家庭教育を専ら補う事とし、小学校においては少し加工

し、中等学校においては殆ど加工し、大学においては専ら加工するのである。

幼稚園の世に必要な働きは「家庭教育を補う」と言う事で、前の文句は家庭においても出来ない事はない。

補うの表す意味

1　家庭教育が本体である。

2　幼稚園の本来の意味が、家庭教育と同質のものでなければならぬ。

なぜ補わねばならないか？

家庭教育に補わるべき必要が無いのなら幼稚園の存在は不用である。骨折ってまで幼稚園に入るのは、家庭教育を補って欲しい為である。

世の中には如何にも明らさまに、欠陥のある家庭が少なくない。例えば、両親とも朝から外に出て居る等、子供の趣味・衛生が不充分になっている。

斯様に貧乏な為ばかりでなく、我が国の上流家庭にも落ち度のある家庭が少なくない。斯様な欠陥家庭の教育を補うのなら大いに必要である。

また田舎の農繁期託児所が必要となり、今日では次第に包括的に普及されてきた。

普通家庭（欠陥家庭に対し、親も相当の教養あり家庭に於いても子供を立派に教育することの出来る家庭）に於いて更に補う必要があるか。普通家庭に於いては家庭にあっても相当立派にやってゆけるのであるが、親心として母は、ほんの少しの不充分な点をも補って貰おうとするのである。

不充分な点とは

1　母は思えらく、この子の母は自分であり又絶対的な愛に於いても自分であるが、近世の教育と言うものは、一つの専門的なもので一つの立派な理論を基とさるべきで、単なる愛情常識ばかりで、やれるものではない。

自分の可愛い吾子の為に現代の与え得べき最も良き機会を与えてやろうと言う親心で、吾等専門家の許へ子供をよこされるのである。

保母たるもの立派な専門家とみなされているのである。

2　また父なり母なりが立派な専門家であっても、その子供を幼稚園に出すという事がある。それは他の点に於いて出来る限りの充分をさせて、全く行き届かせ余り子供を可愛がり過ぎていながら、〃友達〃即ち子供の世界というものだけは、どうしても与える事が出来ないのである。

子供を一人だけ大人の世界に入れる事は、良い事では無いのみか、子供の中に大人を余り入れる事さえも子供の為には好ましい事では無い。

故に子供には、子供の世界を与えて、その中で生かす事が必要である。之が補う意義を出す所以である。

第二節　学齢前の教育

吾国の幼稚園は、明治九年に始まったもの。それから次第に全国に普及し、その幼稚園は、どんな規則によってやられたかと言うと、小学校令施行規則の中に幼稚園の規則が挙げられて居た。それを用いた。

即ち長い間幼稚園に就いては、独立の法令を以て国家は取り扱っていなかった。

幼稚園と同様に、独立の法令を与えられず小学校の中に含まれた規則の下にやっていたのに、盲唖学校があった。

が、色々と当事者の運動により、大正十五年四月二十二日に新しく幼稚園令が出来た。

それ以来、独立施設の規則を持つ正しい国家の教育制度中に含まれるものとなった。

それより幼稚園の社会的認識が明らかになり、本格的教育の中に入り普及の促進をしめした。

（以下歴史事項　略）

ここの幼稚園等は自己活動の研究としては世界一であるが、実に例外的なもので、社会的には容れられぬ高級さである。

本当の幼稚園は、今の託児所の如くやらねばならぬ。託児所では教育せず幼稚園では生活の干渉をしなくてよ

いか、こんな問題は存在出来ない。

この二つを考えてみても結局通ずるものは子供だけを考えられるのである。

真の幼児教育は、託児所でやって始めて出来る。実に託児所の保母こそは情の通じるものである。

（略）

以上は学齢前の幼児の為に、どんな気持ちでどんな方法でなされて来、どの様な変化を見、また現今は如何様になされるのかを世界の大勢より眺めてきたものである。

第三節　保育の意義

保育

幼稚園の先生は保育する人であるから保母と言われる。教育という文字を用いないから保育と教育とは全然別なものの如くもとれる。

保育は本当に軽い意味のものでないのであるが……

…教育と別なものと解されるのは保母の自重、責任等を軽んぜしめるものである。

何故教育という文字を避けるのだろう。教育の本当の

意味を解すればよいのであるが、世間一般の従来の考えは、道徳的訓育にしても慣例として身体的なものを除いたものを意味に入れている様である。

近世、進歩した教育的意義には身体的なものもあるのであるが、やはり教師は心、医者は体という観念が多い。それで幼児教育は斯様に区別されるべきでなく、両方のバランスを取って取り扱うべきである。

それには保育という別の文字をとりのけたナーセリースクールは両者をよく平均させて行ったのである。

幼児を教育するにはその生活によらなければできるものではない。

衣食住は生活と離れるものではない。

保育の保育たるところは生活にふれる事だ。幼児の心を愛すると言っても、その子の生活、衣食住にふれずしては手が届かないものだ。

保母はケーア Care（気が付く、小さいことを行届かす）することが大切。

Nursery School では Education, Teach, 等の語はどこにも設けず Care と言う語を用いている。

子供自身は身体と精神が一つになっている時で、彼らは切り離す事の出来ない生活をしているのであるから、我々の小さな身体上のケアは自ら心に通じているのである。

第二章　保育方法の原理

原理・原則を済ませて実際に入る。

保育の実際とは

1、子供の様々な相違点

2、幼稚園の組織形態

3、教育者自身の性情

以上の三点より「保育はかくあるべきなり」と言うことはできない。

ある形式を通りぬけた後で初めて個々の真価値の現れる独特のものができる。

だからそのどんなものも原則はあてはまる。

従来の幼稚園は妙な型にはまって来た。

フレーベルは彼独特の、生き生きしたフレーベル精神を持っていた。それは型に当てはまるべきものではないのだが、その精神を表現するものとして方法が選ばれた。

方法と精神とは別として考えるべきである。精神は魂から出たものであり、方法は知識から出たものである。

フレーベルの弟子達は多くあったが、彼等にはフレーベルの魂や精神は只ぬけてしまって、彼の方法だけが型にはまって伝わってしまった。所謂、方法で固まったフレーベル流というのが出来てしまった。

フレーベルはGave（in English, Gift）恵まれたるもの　恩物　ということを口にした。

これは彼としての理論・理屈を充分に有している。恩物とは、箱に入った積み木なのである。

フレーベルは恩物を発明し、これを置いた。それには種種の長所もあった事だろうが、後世の弟子達は恩物を用うるところが幼稚園なりと言うようになってしまった。

『母と子の遊戯』この歌と遊戯の結びついた本も、彼の作ったもので彼の当時に於いて役に立ったのであるのに、アメリカでもイギリスでも之を用いた。そして之も型にはまってしまった。

之は弟子が悪いのだが、又幼稚園はフレーベルから始まれりと言う思想がこびりつき、如何に新しい児童心理学説が出ても、型にはまった彼等は見向きもせずに只々昔のフレーベルにこびりついていた。

そういうわけで次第に幼稚園と言う壺にはまってしまった。このような事情にあるのだから、「流」という型はすべからく打破すべきものであるが、又新たな「流」を創作するのではない。故に原理・原則をよく心にしみこませておいて、それ以上は個々別々に独得の説を考えるべきである。

保育の実際方法の基礎としての保育原理

この原理とは、あらゆる様式を含有しうる自由自在性

がある。国家なれば憲法に価する。それでも根本の原理は、実に固くかたまっているのである。

この尊きものは何処より出てくるべきか。勿論教育は人あって成る。教育者による。けれどその人の保育というものは無い。

幼児教育たる事は、幼児を相手にする事によって成る。故に幼児教育の根本原理は、幼児の如何によって発せられるのである。

花を咲かせるにも、その花の特色に依らねば勝手には出来ない。幼児の生活原理から保育原理というものは生まれる。

「幼児に学べ」「幼児の特色に従え」とはこの意。

保育原理がその教育者の特色によって建てられるなら、幾種も無数に出来るが、幼児の本質的特色に対しては唯一の原理なのである。

が、幼児の特色とは言うものの、つかめる事は出来ない。之と言って、かいつまむ事は出来ない。

之から実際の方法を生み出す所の原理に対しては、特色をはっきりさせねばならぬ。

幼児の生活を見つめていると、その特色の大体がつかめるのである。だが口にする事は非常に難題。

最も重要なもの　二つ

一、自発的
二、具体的　　幼児生活の特色を眺めたもの

自発の原理＝之を研究するには幼児の自発的であるという事を見なければならない。

保育は如何なる様式を取っても良い。人々の特色、又その場合の生きた活用をすべきであるが、如何に立派になされなければ、その保育の根本原理に違反する。

又、その結果が実に立派であっても、その方法が自発的に非ざればそれは根本原理に背いた大失敗である。

素人は良いとするが、保育の根本原理は斯様な事を食い止める。

教育とはする方、自己が徹底したいのであるが、やはり自発的でなければならぬ。

何にしても幼児の自発的なる点を少しでも欠いては之

こそ原理的な誤りなのである。

育ててやるべき自発は、他発他動の反対、子供自身の中より生活の力が出、そして自ら動いている。大人・老人は他発他動で自ら動く勢いがない。

子供の伸び伸びと動くその力の現れとしては、落書き、いたずら、けんか、ともなっているんだが、それを見通してみれば驚くべき自発力のある事が分る。

〃生命的〃なのである。

1、この問題の結果、現れについて考えると保育原理等は生まれない。子供の自発性は大人をして困らしめる。

2、又この原因から考える。何故このように自発的なのだろう。原因しらべという事は、この学問の仕事なのであるが、手品の種明かしの様に原因を発見して、それまでという様になる。原因がわかると、その事自身を済ませてしまう傾きがある。

3、結果にとらわれて困るばかりでなく、又その原因を知って解き捨てる事もせず、子供の自発性に驚くのである。

これこそ実に大切なのである。驚くにも自発性の結果とあきれるのではない。

児童心理では、事実をどこまでも客観的に追究しなければならぬが、教育に於いては吾々の感情を交えなくてはいけない。

おどろく

1、動作に表しておどろく、卒倒したり。

2、おどろきのままを抜け出す事によっては芸術が生まれる。歌や詩等に。

3、おどろきから、驚かした相手に対する処置をもってが出てくる。ここに至って始めて教育者としての我々が出てくる。

尊敬する事も、尊重する事も生まれて来る。尊敬すればこそ、尊重すればこそ、自分のふつつか、勝手、或いは教育の結果を招ずる事に依って、彼等の自発を抑える事は出来ない。

フレーベルの周囲の人は、歌等に表して、おどろき、フレーベルは彼らの自発を損なはねず、伸ばしてやる事

は非常に大きな大切な仕事だと思ったのである。

幼稚園の楽しさは、子供の自発に引きずられてゆく楽しさである。

自発性

自発をも少し内容的に、何故子供がこんなに自発的にいられるのだろうと考え度い。

本能というより、もっと深く、まず大人に自発性の少ないのは、その自発を防ぐ何らかの気持ちがある。

1、我々は何事をなすにも凡て効果を意識する。之を効果意識と云う。効果と結果は違う。我々の生活は一日も効果意識なしではいない。之を思慮ある生活と云う。之を流石大人だと言う。だがこの生活の中には純粋的なものは無い。子供には本当にこの意識が無い。意識あれば幼稚園等には来ないのである。

子供には自発を防げる内部的の何者も無い。

効果意識というものなし依って、あの潑剌さが生まれるのだとしたなら、その効果意識に基づくものは決してさけねばならぬ。

だが教育とは非常に大きな効果を意識している。

子供が意識しないでいるのに、我々が大きく期待を持つということは「幼児保育の特色」である。効果意識のない生活とは、いわゆる馬鹿というが、又一面から見れば、人生の最も高級な生活（大芸術家、大学者の心理）である。

今は自発性の事を論じているのである。

子供の場合のある自発性は効果意識なき故であり、又その真剣さも効果等を意識せずしてたった今の生活に夢中になっているからだ。

子供の喧嘩にしてみても実に真剣である。真剣さは即ち力のこもったもので、心理学上からは自発性というのである。

2、時間的の効果を、意識するのでなく、今の自分を意識するのも大人の特徴の一つである。之を自意識と名付ける。

例えば、美しいものに感嘆するにしても、感嘆しつつ

ある自分を考えているのである。無我夢中になることは出来ない。大芸術に接するという事は、絶えず自意識に捕らわれている自分を、すっかり忘れて解放されたい気持ちがあるからである。

自意識を、たしなみとして持つ事は出来るが、生活そのものに率直性というものが無くなる。

例えば、悪い事をする時は自意識の無い時であり、又辛いから自意識を殺さねばならぬ。が、人間はつまらぬ善事をするに、自意識を大いに入れるものである。

子供を愛するにしても、愛してやっていると思うのである。人間の自意識は、実にしつこい。だから根本生活自体は、実に不純である。

子供には自意識ない故に、あの純粋さがあるのだ。大人は、一時、二つの生活をやりつつあるのだ。

人間は凡て、この小さな煩わしい自意識にこだわらぬ生活を望む。

母の愛などは、意識されていないからこそ尊いのである。故に保育に持って来るのは、この自意識に訴えない保育の保育たる故である。自意識の忘れさせねば、自発生活をさせる事は出来ない。

子供を褒めると言うことは、即ち幼児の自意識に訴える事なのである。促す事である。

子供には、修身は教えるべきではない。斯様に考えると、幼児の自発性は実に深い意味を有している。

保母たる者は、人間、人生の余程深い細かな所の分かる人でなくてはならぬ。

何処となく、ある微妙な点が分らなくてはならない。

自発は些も損わるべきでないし、又育てる程でなくてはならぬ。

即ち　一、外的には、くだらぬ干渉をせぬ。

○　人は、子供を無邪気だと云う。

邪気の無い子供。この邪と云うのは、之等の意識を有している事だ。之あれば、幼児の本質的特徴は消されたわけである。スポイルされている。このスポイルするものは、誰かと云うに大人である。

之は大人の根本の教育方針の間違っている事から起こ

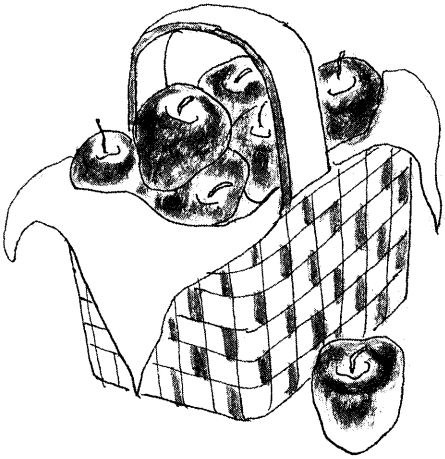
る。又この自意識と云うものは、自然について来るのであるから、子供の周囲にある人の、人格によるのである。

保母として、良き大体の条件は、自意識の余り強いのは避けたいと云う事だ。

良寛和尚等は、実に無自意識な人の代表だ。良寛和尚も、ほていさまも、一人でいる時は、実に深刻な自意識が働いていたのである。

――以下　次号――

（川村短期大学）



臨床の現場から◈◈◈◈◈◈◈◈◈◈◈◈◈◈◈◈◈◈◈◈◈◈◈◈

◈◈◈◈◈◈◈◈◈◈◈◈◈◈◈◈ 子育てを考える　その6

子どもの問題行動
——背景に親の世代の問題が——

飽田　典子

事例1　離婚・復縁のくり返し
——子育ての機能を失った家庭——

○　様々な身体症状が出て学校へ行けない

花子さんは中学校の三年間、全身の倦怠感、偏頭痛、めまい、微熱、筋無力感などを訴えて、ほとんど学校へ行けない状態でした。特にひどくなったのは、両親が二回目の離婚をした中学二年の終わり頃からで、それまでは学校を休むほどではありませんでした。次々に症状が変わるので、大学病院に入院して検査もしたのですが、どこにも異常は見つかりませんでした。以来、彼女の不登校は家でも学校でも〝サボリ〟ということになり、ま

すます学校へ行きにくくなってしまったようでした。いわゆる心身症というのでしょうが、彼女については私も不思議に思うことがありました。というのは、学校からの報告に、彼女は〝難聴のため、学校では補聴器を着用〟とあるのですが、私の目の前では補聴器どころか、かなり小さな物音にも反応するのです。ある時彼女に確認すると、学校へ行くと先生の声も友だちの声も聞こえなくなってしまうとのこと。無意識のなせるわざとはいえ、見事な症状の出没に感服の至りでした。

○　心の病気とは思ってもいなかった父親

学校ではこれまで再三、専門機関への相談を勧めていたようですが、両親は自分たちの問題で手一杯で、子どもの方まで手がまわらない状態でした。やっとけりがつくと、それまで迷惑をかけていた分を取り戻そうと、父親は仕事人間に変身し、ただサボっているだけの子どもにまでつきあっていられないといった様子でした。そして三年生の十二月、「このままでは卒業を認められない」という学校側の強い姿勢に押されて、ようやく相談を申し込んできたのでした。

○　初対面の人に対して警戒心がない

お父さんと一緒にあらわれた彼女は、一見していろいろな問題を感じさせる威力をもっている子どもでした。やせて、目ばかりがギョロッとしている上に、着ているものがチグハグ（上衣は冬物のジャンバーなのに、スカートは夏物）なのです。女親の目が行き届いていないことを感ずる一方、やせた体つきに母親がいる時も十分な愛を受けてきたのだろうかと、疑問に思わせる雰囲気を漂わせていました。

続いて驚いたことは、面接室に入るなり、自分は生まれてこの方、いかに不幸な育ち方をしたか、自分の両親はどんなに悪い人間であるかということを一気にしゃべり出したことでした。普通多くの子どもたちは、初めての人間に対した時、相手がどんな人間であるかを探った上で、適当に自分を表現しはじめるものですが、彼女は

そういう手続きを取る気配がないのです。人なつっこいとか、社交的というのとは異なる、人見知りのなさとでも言うのでしょうか。乳児が母親とその他の人を弁別して人見知りをするのは、対人関係の発達の第一歩であることはご承知かと思いますが、彼女はその頃の問題を出会いの場で私に提示したように思われました。未解決な問題なのか、病気（精神病）のために障害を受けたのかはわかりませんが、乳幼児期にクリアしていなければならない問題を、中学三年の段階で抱えているとしたら、彼女の不登校は相当深刻な事態も想定しなければ、と緊張させられました。

○　止まるところを知らない親への不満

「うちの親は両方ともおかしい。父さんと母さんは小さい時からけんかばっかりしていた。前にも一度離婚して今度また離婚した」「もういいかげんいやになった。小学校三年の時、こんな家にいたらダメになると思って家を出ようとしたんだけど、敷金とか礼金とかがないのでアパートも借りられなかった」「母さんとサラ金をやってたもんで、父さんはお金のことに細かくてケチ」「うちの親は子どもにごはんを食べさせながら、一々、〝大きな口をあけて食べて、誰のおかげだと思ってんだ〟とか言うので、だんだん食べ物が喉に通らなくなってしまった。お腹はすいて食べたいんだけれども、食べられない。今は一日に菓子パン一個とくだもの位。牛乳とか、幼児体験がよくないものは特にダメ」とのこと。

これらのことから、彼女の〝やせ〟は拒食症からくるものとわかり、最初の予想が的中して、教育相談で担当していける事例か否かの検討を迫られました。

○　卒業証書はいらない

「ところで卒業の方はどうなりそうなの？」と、当面彼女の外側で話題になっていることに話を向けると「卒業は関係ない!!」と非常に激しい口調で否定し、「やりたい事がいっぱいあるし、履歴書が必要な仕事はしないから、卒業証書はあってもなくても同じ」と言うので

す。そしてカバンの中から新聞の切り抜きを取り出すと、「ねえこれ見て。このアルバイトどうかなぁ。年齢不問というのを集めてきたんだけどどう思う？」と今までのつっぱった口調から一転して、甘えた声で意見を求めてきたのにはびっくりしました。彼女が抱えている問題からすると、とてもアルバイトが出来る状態ではないと思われたのですが、まだ中学生であるということを理由に意見を保留にしておきました。

○　それでも本当は皆と一緒に卒業したかった

一週間に一度相談に通ったことが認められて、彼女は三月、皆と一緒に卒業することができました。口ではつっぱっていても、卒業できることを知らされた時の彼女はたいへんでした。本当はうれしいのに偉そうに一端のことを言っていた手前、大っぴらにはうれしいと言えない。でもうれしい気持ちがついほとばしり出てしまってあわてる。そんな様子がありありでした。しかし、あわてている自分を私に気取られまいとして、なおも強がってみせる姿に、この子の生きにくさを感じたものでした。

○　中味が空洞の中学三年生

彼女は勘の鋭い頭の良い子です。それだけに両親が自分たちのいざこざに取り紛れている間に、彼女は本を読み、物を書く楽しみをいつしか身につけたようです。ですから実に物知りで弁が立つので、周囲の者は彼女の社会性のなさ、特に対人関係上の緊張には気づきにくいようです。

先日もようやくアルバイトが見つかり、いざ面接という時になっていろいろ言い出したのです。自転車で十分位の所なのに「私そっちの方へ行ったことがないんです」とか、「一日三時間、週三日なんて勝手すぎるんじゃないかなぁ」と、将来自立するための資金稼ぎをするのだと、張り切って探していた時には予想も出来なかった事を言い出して、父親から叱られてしまいました。言うことがくるくる変わる飽きっぽい子どもというのが父

親の評価ですが、私は、むしろこれが彼女の本当の姿ではないかと思いました。そして、この事件をきっかけに、今日の彼女のこの状態は、普通には両親に見守られて、両親と共に生活する中で育まれていくものが、長い間の葛藤のはざまにあって、中味が育っていない結果ではないかと、父親と話し合いました。

事例2　お父さんなんか大きらい

――父親似である自分を抹消したい――

○　美容整形を迫る醜貌恐怖

秋子さんは、中学二年頃から自分の容貌に関心をもち始め、高校に入るととたんに勉強が手につかなくなりました。「みんなが自分の顔を見ているような気がする。どこかおかしいから見ているに違いない。だから、整形手術をしてこの顔を変えてくれなかったら学校に行けない」というのです。

お母さんは、神様から授かった顔を変えるなんてとんでもない、と最初から事この件に関しては一貫した姿勢を貫いているのですが、お父さんは、三人いる子どもの中で、殊の外、彼女をかわいがってきただけに、彼女の要求には弱いのです。こうして学校へ行かない日が一か月、二か月続くと、〝そんなにまで思いつめているものならば、いっそ望みを叶えてやった方がいいのではないか〟と思ったりするようでした。ささった刺は抜けば治るものだからというのがお父さんの言い方ですが、結婚以来、お父さんに逆らったことがないというお母さんも、こればっかりは承服しかねると、一歩も譲りません。

○　会社の地位を家庭に持ち込む父親

お父さんは、田舎から出てきて一代で今の会社を築き上げた苦労人です。それだけに自分に自信があり、他の人の意見に耳を傾けるということが少ない人のようです。家計も必要なものはいくらでも出してくれるのですが、何にいくらということまで全部管理されていて、お

母さんが自由になるお金は一円もないとのこと。ちょっと使途不明があるとすかさず聞かれるし、お金のことだけでなく、生活のすべてがお父さんに管理されていて、「家に帰ってまであの人は社長みたいです」とお母さんは言うのです。たとえば、彼女がきょうも学校を休みそうだと思うと、「〇時に学校へ電話をしておきなさい」と言い置いて出勤し、会社に着くなり「先生は何か言っていなかったか」と折り返し電話をしてくるお父さんのようでした。

見合い結婚をして間もなくの頃、田舎の自分の父親に対して、電話で偉そうに命令しているので、「気分を害されなくちゃいいんですけどね」とつぶやいたところ、「なにい!!」となぐられて二、三日跡が消えなかったことがあって以来「私はあの人には逆らわないことにしました」というお母さんでした。

〇　うちはお母さんだからもってきた

この両親にとっての長子である秋子さんは、両親のこうした関係をじっと見て成長してきました。そして思春期になり、いろいろなことがわかるにつれて「うちはお母さんだから今までもってきたんだよね」と言うようになりました。最近では、家でのお父さんの言動に一々聞き耳を立て、「何よ、偉そうに」と聞こえよがしに言ってみたり、「私ってお父さんそっくりなのよね。だからこの顔を変えてくれなかったら学校へ行ってやらない」と脅しをかけたりして、お母さんは気が気ではありません。

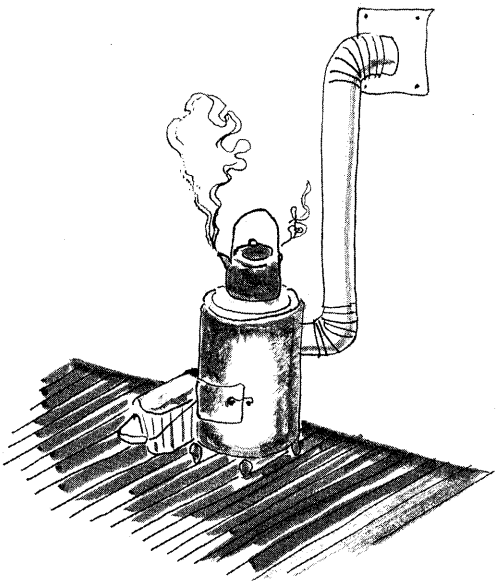
〇　甘やかされるだけでは社会性は育たない

三人の子どもの中で、彼女だけが特別扱いされていること、お母さんからみると、彼女が友だちとうまくやっていけない原因の一つでした。マイケル・ジャクソンの来日コンサートに行きたいと言えば、お父さんはどこからかチケットを手配してくれるし、レコードを買いたいからアルバイトをすると言えば、「そんなことをする位なら、もっと勉強をしなさい」と一か月のお小遣いをポ

ンと六千円にアップしてくれるしで、お父さんの甘やかしぶりは目に余る感じです。お母さんは、彼女がマイケル・ジャクソンのチケットを売出しの前日から友だちと並ぶ約束をしており、困ったなと思っていたのでホッとした反面、このところ友だちとの交流が途絶えていたことを考えると、せっかくのチャンスをお父さんは……と思う気持ちとで複雑でした。

また家の中でも彼女は女王様で、それをお父さんが助長しているようでした。たとえば、彼女がテレビを見る席というのがいつの間にか決まっていて、そこに他のきょうだいがすわっていると、お父さんは「ほらそこどきなさい」と当然のようにその席を彼女に譲らせるのでした。こういう事が起こる前まではお母さんも気にとめて見たことはなかったのですが、改めてお父さんのやり方を注意してみると、これでは、彼女に外で友だちと仲良くしなさいと言っても出来るわけがないと思ったそうです。そして「私も自分だけが我慢していればよいと思っていたのですが、子どもに影響が出るのだったら、もっと主人とけんかをしてでも主人のワンマンを直して来なければいけなかったんでしょうか」と考え込んでしまうお母さんでした。

結果的には彼女の美容整形へのこだわりは、自分に「ノー」を言えないお父さんへの挑戦で、容易には「イ



エス」と言えないような内容を心の無意識が選択して、お父さんに迫った事件ではないかと解釈することができました。このお父さんが他人の意見に耳を傾け、最愛の彼女に「ノー」といえるようになれば、彼女は美容整形を父親に迫る必要がなくなるのではないかと予想しております。

以上二つの事例は、子どもが様々な症状を出すことによって、両親の世代が抱えている問題を白日の下にさらすことになった事例をとりあげたつもりです。前回のうその例では、その背景にその家庭内の人間関係の縮図が指摘されましたが、今回は親の生き方を問う形で子どもが問題行動を起こした例といえます。

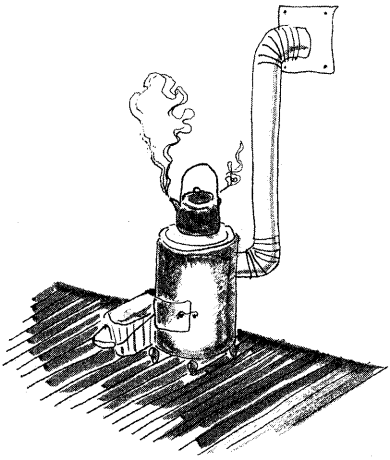
一方、親の生き方を問うのは思春期の課題そのものでもあるわけで、人間である以上、避けては通れない関所のようなものです。そこで健康な機能を維持している家庭では、子どもがつきつけてくる無理難題を、親としての立場で受けとめ、四つに組んでこの時期を通過するのだと思われますが、どこかに歪みがありながらかろうじて家庭という形態を保っているような場合には、そこで問題が噴出するか、子どもがあえて問題提起をしない限り、両親のそうした生き方は修正されることなく次の世代へと引き継がれていくものと思われます。その意味では、ここに登場した二人は正に自分の身を挺して家庭の変革者たらんとした真の勇者といえます。最近は核家族化が進み、なおかつ住宅事情が悪化する中で、両親が抱える問題がもろに子どもに影響する例が増えているように思われます。それ故、家族療法というのが脚光をあびるようになったのも時代の流れのような気がします。

また母親が母親であることだけで十分という時代ではなくなり、母であると同時に自分自身であり、さらには職業人でもあるという時代を迎えて、子どもたちが子どもとして大切にされることが保障されにくくなりつつあるように思われます。その一つの典型が、東京の豊島区で中学三年の男の子を頭に五人の子どもが置き去りにされた事件がありましたが、まだ記憶に新しいことと思い

ます。これほどではないにしても、子育てを他人まかせにして仕事に夢中な母親。放課後の子どもを塾にという風潮が子どもと共に食卓を囲むということを奪い去り、子どもはほっかほっか弁当でお母さんはカラオケバーといった例は事欠きません。そういう中で子どもたちはどう生きていくか、子どもの問題行動が多様化、複雑化していく現在、相談にかかわる者として家庭がどうあったらよいのか見えにくくなっている昨今です。

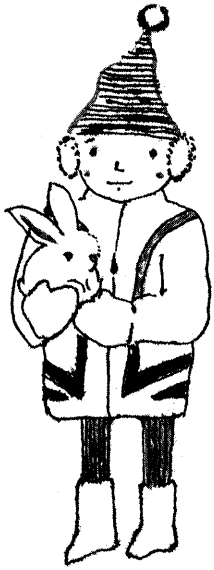
今までに六回にわたり教育相談の窓口から子育てについて考えてまいりました。心を病んだ子どもたちと共にいると、不器用で純粋なるが故に、うまく世渡りが出来ないことを感じます。打算的で能率のみを追求しがちな世の中にあって、こういう子どもたちが存在することにどこかホっとした安らぎを感じてしまうのは、私自身に彼らと共鳴しあう何かがあるからでしょうか。これからもきっと、彼らの問題行動（症状）が比喩しているなぞ解きの魅力の虜となって、人生とはを教わり続けていくことと思います。

（東京都立教育研究所）



アメリカ育児事情

はるにれの会
前田　留美



一月一日。天気　雪。風　強し。気温　零下二十五度。ニュースで、寒さが厳しく危険なので外出を控えるように、と警告有り。それにもかかわらず、我家では十家族ほど集まり新年を祝う――とこれは昨年の話。

明けましておめでとうございます。

ここはアメリカはイリノイ州シカゴの郊外、ミシガン

湖に面したエバンストンの町。夫、私、娘の家族三人がここで迎えるお正月も二度目となりました。

初めての海外生活が始まったのは一昨年の八月、娘、茜が一歳二か月の時です。

○ここはアメリカ

こちらに着いてから数日後、茜をストローラー（ベビーバギー）に乗せ、ダウンタウンまで散歩に出掛ける。途中、人と擦れ違う際、目が合うと必ず「ハーイ」と挨拶され、茜を見て「かわいいお嬢ちゃん」「いくつ？」と声をかけてくる。実に明るい。その中で年配の御婦人に「靴を履いてないのね。すごいわ！」と言われ、少々戸惑う。茜は、まだひとりではよく歩けなかったし、特に寒い日でもなかったので、靴下も靴も履かせていなかったのである。感覚の発達や健康上の理由から冬でもなるべく素足にさせておいた私には、夏の暑い日にそうしておくのは当然のことだった。しばらく行くと、今度はやはり茜と同じようにストローラーに乗った二歳位の子供の「ノー・シューズ、ノー・ソックス」の声が聞こえてきた。これには、さすがの私も驚いた。よく注意してみると、明らかにまだつかまり立ちもできないような乳児も靴下と靴を身につけている。ベビー用品店には新生児からの靴もかなりの広さを占めて並べられている。どうも部屋の中でも靴を履いて過ごすこの国では靴は服と同じ感覚で履かれており、新生児といえども服を着る時は靴を履いているものらしい。

赤ちゃんが小さな靴を履いているのは確かにかわいらしいものだが、だからといって歩けもしないのに窮屈な靴を履かせられる子供はいい迷惑かもしれない。しかし、ここはアメリカ、ここにはここのやり方があるのだ。

参考の為にこの点について何人かのアメリカ人に聞いてみると、全員、外では乳児にも靴を履かせているが、家の中では色々であった。学生の中には平気で街の中を裸足で歩いている人も多く見かけるし、要するに靴が服装の一部であるとはいえ、時・場所・場合をわきまえて

おけば、履こうが履くまいが、履かせようが履かせまいが自由なのであろう。

○感謝祭の日に

感謝祭（サンクスギビングデー、十一月第四木曜日）はクリスマスと並ぶ大きな祝日である。この日、多くの家では離れて住んでいる家族が揃い、また人を招いて、ディナーを共にし、秋の収穫を感謝し祝うのが常である。我家もある家に招ばれ、多くの友人達とディナーを楽しむこととなった。

この家は夫婦と子供が三人の家族で、一番下の子供は六か月のジョナサンである。大人は色とりどりの御馳走の並んだ大きなダイニングテーブルで子供は子供用の低いイスとテーブルで、それぞれ感謝のお祈りをしてディナーが始まった。と、そこへ子供の泣き声。寝ていたジョナサンが目を覚ましたらしい。母のダイアンはジョナサンを連れに二階へ。しかし、先の泣き声は階上から聞こえて来たのではなかったようだ。尋ねると、スピーカーからだという。家が広く、子供が泣いても直接、聞こえないので、子供部屋にトランシーバーを置いてあるという。特に上流というわけでもない、ごく普通の家庭である。日本では考えられない家の広さだ。

さて、ジョナサンを連れて来たダイアンはテーブルに戻り、会話に再び加わり始めた。話しながら何やら白い布をジョナサンの頭からスッポリかぶせた。私は、ジョナサンが眠るには明かる過ぎるので、そうして視界を遮っているのだろう、それにしてもおもしろい事をすると思いながら見るとはなしに眺めていた。ダイアンは相変わらず教育か何かについて話している。暫くして布がはずされると、そこにはジョナサンの満足そうな顔があるではないか。何とダイアンは口では全く普通に話をしながら白い布の下でジョナサンに授乳していたのだった。この場合、もし私だったら席をはずし別室で子供の目をしっかりと見つめながら授乳したであろう。授乳時には他人と話をしてもいけない、他の事に気をとられてもいけない、それはどんな事にも優先する母と子だけの大切

な時であると考えていた私は相当なショックを受けた。その行為がただペットに餌をやっているように見えて、反感を持ったものだが、今思うと、その日のホステスであるダイアンはディナーの席から離れることが出来なかったのであろう。

このダイアンは、子供達の母であると同時に彼らの学校の先生でもある。ジョナサンには八歳の兄、六歳の姉がいるが、彼らは学校には行かず自宅のキッチンの隣にある部屋で母に全ての教科を教わっている。彼女は今の学校教育に疑問を持っているのでそうしているらしい。自分勝手に教えているのではなく、そうした人達の組織があり、カリキュラムがきちんとできているという。良し悪しは別にして、このような教育法が認められ、それをしっかりと実行している家族がいることを知って、またもカルチャーショックを感じたのだった。

○アメリカの母親は元気？

夫は疲労回復の為、しばしばサウナを利用している。ある夜、サウナから帰宅して言うには、サウナの入口にかごに入れられた乳児がぽつんと置かれ、驚いて中にはいると、その母がサウナで汗を流していたという。聞くと産後四週間で少し太り過ぎたのでシェイプ・アップよ、と笑って答えたらしい。私は自分の産後四週間の頃——それまでの家事に加え、初めての育児でてんてこ舞い、寝不足で常に疲れていた——を思い出し、その余裕に感心してしまった。

また、ある日、茜を連れて公園に散歩に出た際、子供に日光浴をさせながら優しく微笑みかけている幸福そうな母子に出会う。生まれて一か月位だろうか。「何か月？」と声をかけると「四日。」との答。「四日？」と聞き返すともう本当に嬉しくてたまらないといった表情で「ええ、四日。」生後四日といえば日本では母子共、まだ病院のベッドではないか。アメリカでは出産の為の入院日数は通常三日、帝王切開でも四日と聞いている。ということは彼らは前日にでも退院してきたのであろう。日本では普通でも入院は一週間、その間、服を着て外に出

るなど考えもつかなかった。それに生後四日の新生児を外に出して良いのだろうか？　生後一か月頃に外気浴から始めて、日光浴も第一日目は手首、足首から先、第二日目は……と保健所からの指導が確かあったが。

旅行・買物・子供連れで行ける気軽なパーティーなどに出掛けると、生後二週間・四週間・六週間といった新生児、乳児を連れた夫婦が目につく。抵抗力、体力のまだ弱い子供をそのような場所に連れ出して良いかどうかはともかく、まだ首も座っていない子供達を連れた母親が、疲れた表情ひとつ見せず、元気溌剌と活動しているのには感心させられる。

この違いは一体、何なのだろうか。第一にアメリカ人と日本人とでは体力が根本的に違うということであろう。この体力の差は男性社会でも明らかなようで、夫と友人達の間の話題にもしばしば上る。もともとの体の作りが違うとなれば、これはもうどう足掻いても仕方のない事で諦めるしかない。しかし友人の中にアメリカで出産した日本人も数人いるが、彼らもまた元気な事を考慮すると、どうも体力の差だけではないらしい。

十日前に出産を終えた日本人の友人宅に御見舞いに行くと、彼女はもう洋服を着て、私にコーヒーを入れてくれ、彼女の夫はその間、名前が付けられたばかりの我子を抱き、おむつ替えなどの世話をしていた。彼らは退院直後は食事の用意だけは人に頼んでいたが、以後は全く他人の手伝いなしでしている。

アメリカに来て、まず感じたのが家事が合理的で非常に楽だという事であった。週に一度買物をし、食料品は大型冷蔵庫に収納、食器洗い機、ディスポーザー（流し台に取り付け生ごみを処理して下水に流す機械）の利用、洗濯も週一、二回コインランドリーでまとめて乾燥までし、始めてから畳み終わるまで、せいぜい二時間。等々。その合理性がベビー用品にまで徹底している。おむつは殆ど百パーセント紙おむつ、ミルクも粉ミルク・液体ミルクがあり、液体ミルクは調乳の必要がなく瓶の口にそのまま使い捨ての乳首を付けて飲ませる。従ってこれは消毒の必要がない。また哺乳瓶も枠だけの物があ

り、ミルクや水、果汁などはプラスチックの袋に入れ、それを枠にはさみ使用し、この袋も使い捨て。瓶詰のベビーフードも種類が豊富、と数え上げたらきりがない。そして出産前の両親学級では出産後の負担を少しでも軽くする為に、使い捨てのプラスチック、或いは紙のコップ・皿を大量に準備しておく事を指導しているという。

自分の場合を思い出してみると、朝起きて、まず、洗濯機を二度まわし、その合間に脱脂綿・哺乳瓶の消毒、三度の食事の準備に後片付け、子供が寝ている間に急いで買物、天気が悪くおむつが乾かなければアイロンかけ、そして勿論、授乳・おむつ替えなどの子供の世話もしていた訳だが、とにかく育児の本質的でない部分に精力の大部分を注いでいた。もし、そこでおむつの洗濯、食後の片付けだけでもなくなれば、かなり時間・労力とも短縮され、もっと元気で余裕のある母になれたのではないかと思う。にもかかわらず、子供が生まれて大変なのは当然、疲れて当然と思い、むしろその余裕のない忙しさに一種の充実感を覚えていたのは、今となっては少々疑問である。

何に一番の優先順位があるかを考え、あまり重要でない点は少々我慢し、ばっさりと切り落としていくアメリカの合理性に学ぶ点が多い。（資源や処理等の問題もあるが……）

また、ここで忘れてならないのは夫の育児参加・家事参加が当然のように行われている事である。出産前の両親学級に夫婦揃って出るのは常識。お産も夫婦協力し、誕生後も母親にしかできない——母乳を与える——家事以外は自ら進んでおむつを替えたり、ミルクを与えたり、パーティーでは抱っこベルトで子供と一体になっていたり、とその姿がごく自然なのである。夕方になれば、ある時刻を境にして公園で遊んでいた母親が父親と入れ替わるし、（この交替は実に見事）、育児などの講演会・研究会などは大抵、夜に開かれ、両親揃って参加している様子。育児・躾は母親の役目と大方見なされているどこかの国とは違い、自分達二人の子供は二人で育てるという意識がはっきりしている。

楽しく、また一大事である育児を両親が同じレベルでとらえれば、母親はさらに活力に溢れ、父親は人間性が回復され、子供はその両親からそれぞれ異なる刺激を受け、豊かに柔軟になり、三者にとってプラスになることは疑いない。とはいうものの、仕事にとられる時間が多く、家族が一緒に過ごす時間が極端に少ない今の日本のサラリーマンの家庭で、夫婦が同じ割合で育児参加する事は、夢のまた夢であるが、育児はふたりの仕事という意識だけでも皆が諦めずに持ち続けていれば、少しずつでもよい方向に変わっていくのではないかと思う。

○子供は子供、親は親

アメリカではあまり他人に干渉しないのだが、ある時「あなたは子供を抱き過ぎる。泣いてもほおって置かなくてはいけない。」と注意された事があった。私は、茜が甘えてきたら迷わず抱き上げていたし、特に他人と話している時はすぐに膝に乗せてやったりしていた。そうすれば茜は満足して静かになり、話も中断しないですむからである。アメリカ人の親子であれば、ひと言「ノー」と言っておしまいである。甘えてきた子供はその親の毅然とした態度を見て、再びひとりで静かに遊び出す。

またレストランでいつも感心するのは、どんなに幼ない子供でもハイチェアに大人しく座っていることである。決して大声を出したり走り回ったりはしない。親達は時々、子供に声をかけるだけで、自分達の食事を楽しんでいる。

大人同志が話をしている時はそこに立ち入らないよう躾けられている、というより、大人の世界に立ち入るべきではないという事が自然に身についているようである。

食事に関して思い当たるのは、子供の食べ残しを親が食べて片付けることは決してないという事だ。ここにも親と子の境界がはっきりしている。

幼児がいたとしても毎日曜日には教会に行き、パーティーの数が減る訳でもない。当然、ベビーシッターに子

供を預けることになる。常に子供のいる所に母親がいる、母親がいれば子供がいるという姿はなく、夫婦だけ或いは母親だけの時間・楽しみを持っている。

「欧米では子供は生まれた時から両親とは独立した寝室で寝ているが、日本では子供が幼い頃は母親を真中に家族が川の字に寝ている家庭が多く、それが理想的」という記事を読んだ事があるが、その理由のひとつとして日本の母親は愛情表現が苦手という点が挙げられていた。そう言われてみると確かにそうで、子供と一緒に遊んでいる時のアメリカ人の母親の動作の大袈裟な事、表情豊かで賑やかな事にはとてもかなわない。子供に愛情を示す時には徹底的に、そして自分の時間には子供の事は全く気にしない、こちらの母親にすがすがしさを感じる。そうする事によって自分自身も子供も客観視でき、親子関係もめりはりのあるものになるのだろう。

アメリカへ来て一年半近くたつ。その間、茜はひとりで歩き、走り、飛び跳ねるようになり、自分の頭で考え、話し、歌を歌うまでに成長した。茜の成長と共に私達家族三人の影響の及ぼし合い方に変化が見られるのは当然だが、こちらへ来て夫が家族と共に過ごす時間が大幅に増え、また世界各国の様々な考え方に触れられる事が家族の関係にもたらした変化は大きいように思える。日本では明らかに夫――私・茜となっていた関係が夫―私、夫―茜、私―茜そして夫―私―茜という、少々複雑な、いい関係になりつつある。

明けまして　おめでとうございます
本年もどうぞよろしく
お願い申し上げます

新しい年とともに表紙・扉のデザインを新しくしました。いかがでしょうか？

津守たたえ、堀合文子両先生とも『幼児の教育』誌とは昔から親しんでおります。お役に立てば」と心よくお引き受けいただき、編集委員の先生がたとも、作品のできあがるのを楽しみにしておりました。今年は、もっと現場の先生がたの声や、子どもの様子を織り込みたいと気持ちばかりが高ぶりますが、どうなりますことやら。

ある幼稚園での話。

幼稚園や母の会で主催する講演会、音楽会などへの母親の参加が近年とみに増えている。この園では保育中に行うことが多いが、保育後に行う時には卒園生の母による託児（園児）を用意する。

母親の参加が増え、子育ての日常の中で、ひとときの豊かな時間を求め、得られることは大変良いことなのだが、いつもここで問題になるのが未就園児の扱いである。別室にビデオの部屋を設けてあるのだが「未就園児の託児をなぜしない」と毎回声が上がる。「ちょっと待ってほしい。ここは幼稚園である。それにそんなに簡単に、入園前の子どもをはじめての人に預けていいのですか。」と言いたくなるが、どうもこちらの論理は通用しない。条件は悪いが、母子でビデオの部屋できき、子どもの様子を見て静かにできるようなら会場に入るという事にどうして思いいたらないのだろう。

家事・育児の合理化、少子化、体力の向上などで、母親の社会参加も可能になったが、反面、核家族化、近所づきあいの貧困さと共に、我子と我身に合った身の処し方という最も母親に備わっていてほしい特性を自ら放棄する人が多いように思うのは私だけだろうか。　（Y）

幼児の教育　第八十八巻　第一号
一月号　©　定価　四〇〇円
昭和六十三年十二月二十五日　印刷
昭和六十四年　一　月　一　日　発行
東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行人　本　田　和　子
東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会
東京都港区三田五ノ一二ノ一
印刷所　図書印刷株式会社
東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京九－一九六四〇番
TEL・二九二－七七八一代
⊙本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

※万一製造不良の点がございましたら，おとりかえいたします。

動物と子ども

―園での飼い方・育て方―

イヌやネコ、ザリガニ、カメなど園で飼育したい動物の飼い方育て方を図解で説明。

動物飼育は、深い喜びと心を震わせる悲しみの体験を与えてくれ、情緒を育てます。ただし、動物は生き物であり、人間と同じように痛みや喜びの感情も感じるものです。動物にとって人間の行為がどうなのかを知ることは、より小さいもの、より弱いものへの思いやりの心も育てます。動物と子どもとの楽しい関係を育てるコツを教える一冊。イラスト多数。

A5判・168頁・定価1,300円

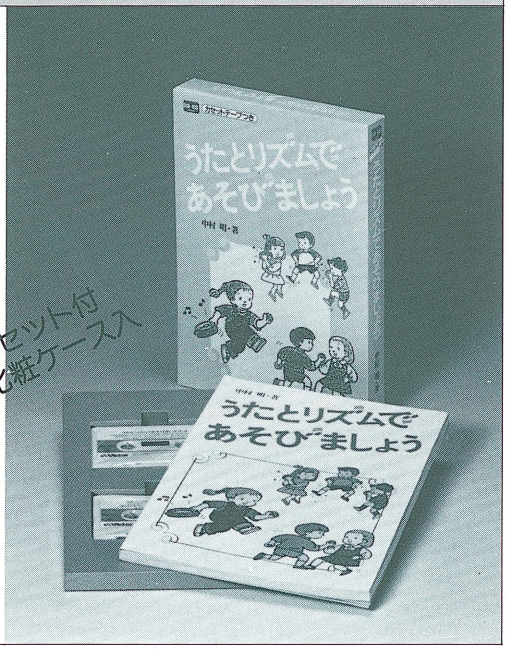
くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支店・支社・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの
フレーベル館

うたとリズムであそびましょう

中村　明・著

うたはカセットテープにまかせてその分、子どもと一緒にリズム表現遊びが楽しめるイラスト実技書。



遊び方はイラストの表現解説がつき、全曲ともコード入り楽譜が掲載されていて、どなたにも分りやすいこと。マーチ・ルンバ・サンバなどきいただけでも体がはずみ、リズム表現に入りやすい選曲の配慮。身近な動物の歌で表現しやすい配慮をし、遊びのうたは友だちづくりに役立つなど、保育現場に欠かせないリズム表現の保育実技書。

B5判・124頁・カセットテープ2本付（1巻①8曲16分②7曲16分 2巻①7曲15分②8曲17分）・定価4,800円

書籍のみ／B5判・124頁・定価1,800円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支店・支社・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの
フレーベル館